

Title	京大広報 No. 401
Author(s)	
Citation	京大広報 (1990), 401: 1-10
Issue Date	1990-12-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/209275
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 401

京都大学広報委員会



京都大学法学部創立90周年記念式典 ー関連記事本文6ページー

目 次

＜大学の動き＞

京都大学市民講座「ことば」

講演要旨（その1）…………… 2

平成3年度大学入学者選抜

大学入試センター試験の実施…………… 4

外国人教員、留学生懇親会…………… 4

年末年始の火災予防と特別防火演習…………… 4

＜榮譽＞

大地原 豊名誉教授がフランス学士院

客員会員に選ばれる…………… 5

＜部局の動き＞

生体医療工学研究センターが開所式を挙行…………… 5

法学部で創立90周年記念式典…………… 6

＜紹介＞

霊長類研究所神経生理研究部門…………… 7

＜訃報＞…………… 8

「白馬山の家」の冬季開設…………… 9

日 誌…………… 9

＜随想＞

風のように 名誉教授 柳島 静江…………… 10

＜大学の動き＞

本学では、広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を、10月20日、27日、11月3日の各土曜日に開講した。

ここに、本講座の講演要旨を掲載する。

京都大学市民講座「ことば」

講演要旨（その1）

ことばを生かすコンピュータ

工学部助教授 西田 豊明

我々が日常使うことばは自然言語と呼ばれる。自然言語とコンピュータの関わりは情報という概念を通して理解できる。すなわち、自然言語は情報を表現したり伝達するための媒体（media）とそれに関わる取り決めであり、コンピュータは媒体によって表現された情報を処理する機械である。ここでは自然言語とコンピュータの接点を三つのタイプに整理してみた。

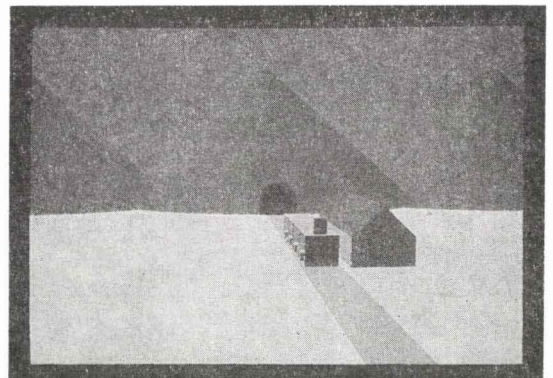
第一の接点は、自然言語の生成・加工・蓄積・伝達のための道具としてコンピュータが使われる場合である。例えば、ワープロ、電子化辞書、音声合成・認識装置、自動翻訳器、テキストデータベースなどがこの範疇に入る。最近のデバイス・ハードウェア・ソフトウェア技術の進歩によってこうした道具を手軽に使えるようになった。

第二の接点は、機械と自然言語で対話することを可能にするインターフェース装置としてコンピュータが使用される場合である。コンピュータは自然言語で与えられた指令から機械の指令を自動生成する。まだ試作段階のものが多いが、音声で操作できる機器、自然言語でアクセスできるデータベース、自然言語によるプログラミングシステムなどがこの範疇に含まれる。

第一の接点と第二の接点との違いは、後者では発話によって実際に機械が操作され、それによって一定の効果が生じることである。従って、コンピュータが発話の内容を正しく理解できるかどうか重大な関心事になってくる。人間はどのように自然言語を理解しているのか、何をもって発話を理解したと言えるか、コンピュータは自然言語をどこまで理解できるか、といった問題に真正面

から取り組んでいく必要がある。

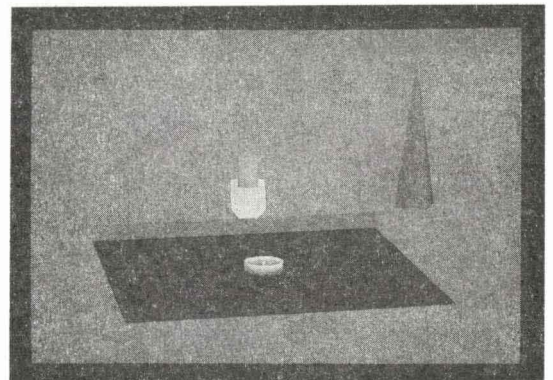
自然言語とコンピュータの第三の接点は、自然言語理解や生成に関する知見を得るための実験装置としてコンピュータが使用される場合である。ここではコンピュータによってシミュレートできるように設計されたモデル（＝コンピュータモデル）が中心的な役割を果たす。この範疇には、質問応答システム、対話システム、物語理解システム、自然言語文章から情景の再現を行うシステムなどがある。最近では、与えられた文章の脈絡の理解だけに留まらず、主観、感性、学習など人間の思考のより深いレベルへの取り組みが行われている。（平成2年10月20日講演）



自然言語理解システムによって再現された情景（その1）
入力テキスト：国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

夜の底が白くなった。
信号所に車が止まった。

「雪国」川端康成（1947）



自然言語理解システムによって再現された情景（その2）
入力テキスト：山下公園の中央には噴水がある。

噴水のところから公園の柵の向うに
氷川丸を見ることができる。
氷川丸の右方にはマリントワーが立っている。

ホモ・ロクェンス

—ヒトの進化と言語の進化—

教養部教授 大橋 保夫

人間を他の動物種から区別する最大の特徴は言語だとする考え方が、昔から支配的である。この観点から、ホモ・ロクェンス *Homo loquens* (コトバをもつものとしての人間) という表現が使われる。かつては、霊長類を始めとする他の動物のコミュニケーションと、人間の言語によるそれとは根本的に違うとされて来たが、現在ではむしろ、両者の関係は連続的に考えられている。では人間の言語と他の動物の「言語」とは、何が違うのか。

言語は一つの記号体系であるから、記号操作能力を前提とするが、ヒト以外の動物種も、複雑さの程度の差はあってもシンボル使用能力をもつ。また有名なミツパチのダンスが蜜源の方向、距離を示す例や、チンパンジーの実験でもわかるように、分節されたメッセージを伝達している。したがって他の動物の記号行動を昔のように単純に考えてはならない。

言語記号は、観念と音声(記号学の用語で *signifiant* と *signifié*) の結合からなる。観念は事象の範疇化であり、範疇化能力なくしては、いかなる動物も、無限に多様な世界の中で生存は不可能である。また他の個体に伝達するためには、範疇が社会的コードになっていることが必要であるし、情報伝達行動を通じて、個体は範疇を習得する。その条件はヒト以外の動物にもある。しかしヒトの場合、言語なくしては成立しえない観念を使うことで知的発達を遂げ、文化を形成した。ヒトの場合は、観念が先行して、その名前として言語記号があると考えるのは誤りで、言語と思考との関係は相互的である。

言語の媒体は、文字や手話でもわかるように、必ずしも音声でなければならないわけではない。しかし、ヒトの進化、言語の発達を考える時には、ヒトの言語が、もともと音声の使用を前提としている事実は重要である。音声の最大の利点は容易に二重分節ができることであろう。つまり人間の言語によるメッセージは、まず意味をになう

表意単位(単語など。その最小単位が記号素)に分節される(第1次分節)。つぎに各記号素は、それ自体は意味をもたぬ、各言語に一定数存在する音素に分節される(第2次分節)。この二重分節は、文化、民族のいかんを問わぬ人間の言語すべてに共通な基本構造である。ヒトは音素を組み合わせ、事実上無数の言語記号を作り出しうる。さらにその表意単位の結合で、無限のメッセージを作り出すシステムをもっている。

ヒトの記号体系創出(*signification*)の能力を重視しなければならない。言語記号は根本的には恣意性をもつ。えさや電気ショックで有縁性を作り出して、人間が作った記号を覚えこませるのは違う。ホモ・ロクェンス *Homo loquens* は *Homo significans* つまり記号体系を作り出すものとしての人間と言いなおしてよい。このようなヒトの言語能力は文化のレベルの如何を問わず普遍的だが、地球上の言語は何千とある。この言語の多様性は、ヒトの言語能力の発現、言語の創造性、ヒトの優位のあらわれなのである。

動物の情報伝達の研究が進み、とくにダーウィンの『人類の起原』以来、人間の言語とサルと言語の共通性を強調する傾向が強くなった。サルは声帯が発達していないだけのことだ、とする見解もある。しかし同一視する傾向はヒトの言語の重要な特性を見失わせるとともに、異文化を誤解させる危険性をはらむ。たとえば、以上に掲げたようなヒトの言語すべてにあてはまる根本的特徴を無視して、語数だけを比較して類人猿とヒトの言語発達とを論じ、チンパンジーが何語を使い分け、2歳の幼児が何語、未開人が何語、というような言い方が行われる。また言語の類型と進化についての古い理論に結びつけて、中国語などの孤立語がサルの言語にもっとも近く、日本語などの膠着語がその次で、ギリシア語や英語、フランス語などの屈折語がもっとも発達した形だとする俗説がある。これらは、印欧語以外の言語に対する偏見を生ずるのみならず、ヒトの進化の理解を妨げる。

ヒトは木から下りたサルと言われる。直立二足歩行により手が解放され、口を運搬に使う必要がなくなり、言語が発達した。それが脳の発達と並行することも確かめられている。

音声（メッセージ）は瞬時に消える。しかし、言語（コード）は集团的記憶であり、文化的所産である。単語や文法の中に、経験が蓄積されている。経験の蓄積と世代を越える知識の伝達に言語の果たす役割は決定的である。

言語の獲得は、生物としてのヒトの進化を規定した。ヒトは言語を獲得したことによってヒトになった、というのはノーベル賞を受賞した分子生物学者モノー（Monod）の見解である。言語能力はヒトの遺伝的形質に組み込まれた生物的基本性質であるとともに、発達した現在の言語体系はそれを越えた文化的所産である。人間は自ら、生物としての進化の条件を作り出したのである。自然と文化の関係は一方的ではない。

（平成2年10月20日講演）

懇親会は最初に、西島安則総長の挨拶があり、佐野哲郎学生部長の発声による乾杯で始まった。中国、韓国、フィリピン、マレーシアの舞踏や各国の歌が披露され、午後8時過ぎに閉会した。



平成3年度大学入学者選抜 大学入試センター試験の実施

平成3年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成3年1月12日（土）、13日（日）の両日に実施される。

このため本学では、1月11日（金）、12日（土）の両日の授業が休止される。

試験の概要は次のとおりである。

1. 期日等

1月12日（土）

外国語、数学(A)、数学(B)、理科(A)

1月13日（日）

理科(B)、国語、社会、理科(C)

2. 試験場及び志願者数

北部・教養部・本部・南部の各構内及び関西文理学院鞍馬口校

合計8,931人

外国人教員、留学生懇親会

恒例の外国人教員・留学生懇親会が12月12日（水）午後6時から、都ホテルで開催され、外国人教員、留学生、教職員、招待者約800人が出席した。

年末年始の火災予防と特別防火演習

本学教職員並びに学生諸君には、日頃から火災予防に御協力願っているが、年末年始の火災多発期を控え、この機会に一人一人が防火についての認識と理解をなお一層深めるようお願いしたい。また、消防署による本年の立入検査の結果、ガス器具とガスゴム管との接続部の不備、消火器の取替・設置等の不備、高圧ガスボンベの転倒防止措置の不備、廊下等避難経路上の不備、喫煙管理の不十分等種々の不備事項を是正するよう指示されている。それぞれの場において、これらの是正指示事項に留意し、防火管理の強化及び消防用設備の点検等を実施のうえ、早急に改善されるようお願いする。

本学には、学内の火災事故に備えて、自衛消防団が置かれているが、本部地区自衛消防団による恒例の年末特別防火演習を12月19日（水）午後1時30分より実施する。当日は、教育学部の協力により教育学部本館4階から出火したものと想定し、通報連絡、初期消火、避難誘導、救出、物品搬出等一連の総合訓練を行い、自衛消防団の消防車による活動のほか、左京消防署からも数台の消防車が出動して、合同の消防訓練等を行う。なお、宇治地区では11月15日（木）に実施済みであり、病院地区では12月20日（木）に実施する。

（経理部）

< 栄 誉 >

大地原 豊名誉教授がフランス
学士院客員会員に選ばれる

このたび、大地原 豊名誉教授が1990年6月29日付でフランス学士院 (Institut de France) の碑文・文芸アカデミー (Académie des Inscriptions et Belles-lettres) の外国人客員会員 (correspondant étranger)

に選ばれた。碑文・文芸アカデミーはフランス学士院を構成する五つのアカデミーの一つであり、40名の会員からなる。因みに他の四部門は、アカデミー・フランセーズ (Académie française) [40]、科学アカデミー (Académie des Sciences) [66]、人文・社会科学アカデミー (Académie des Sciences morales et politiques) [40]、芸術アカデミー (Académie des Beaux-arts) [40] である ([] 内は会員数)。

以下に大地原 豊名誉教授の略歴、業績等を紹介する。

大地原 豊名誉教授は、大正12年、京都市に生れ、昭和22年3月京都帝国大学文学部文学科を卒業し、昭和26年から同29年までガリオア人事交流計画留学生、フランス政府給費留学生、インド政府給費留学生として、それぞれアメリカ、フランス及びインドに留学した。特にフランスでは、パリ大学のルイ・ルヌー (Louis Renou) 教授について、サンスクリットの文法文学文献の研究を開始し、生涯の研究の基礎を固めた。帰国後は関西大学講師を経て、昭和32年5月京都大学文学部助教授、昭和47年8月には教授に昇任、梵語学梵文学講座を担当し、昭和61年に停年退官、名誉教授となり現在に至っている。

同名誉教授の研究業績はインド文学の諸分野に及んでいるが、特に力を傾注した主題として、サンスクリット土着文法学の研究を挙げることができる。主著『カーシカー・ヴリッティ』(Kāśikā-vṛtti) 3巻 (Paris, 1960, 1962, 1967) は古典サンスクリット文法を大成したパーニニ (前5世紀) の文法書に対する7世紀の土着注釈書の仏訳

注であるが、専門家ですら容易に近づけなかったこの難解な書物を他の土着注釈書と比較することにより見事に解明し、世界のインド学界に於ける名声を不動のものにした。

同名誉教授は昭和39年と同45年にフランスに研究留学し、その後国際サンスクリット学会副会長をつとめ、またフランスその他の諸国から第一線級の研究者を我が国に招聘し、国際学術交流に大きな貢献を果たした。これらの業績により昭和52年にフランス政府から教育功労勲章 (Palme académique) 「騎士称号」 (Chevalier) を授与された。昭和60年にはコレージュ・ド・フランスからの招聘を受けて講義をした。また、昭和63年10月、京都国際会議場にフランスの東洋学研究者代表団を招いて5日間にわたって開催された日仏コロク「中央アジア諸言語文書」部会に於て、主催者として会議・討論をリードした活躍は記憶に新しい。

近業として、インド劇作の分野での『公女マラーヴィカーとアグニミトラ王』(岩波文庫) の出版が特筆に値する。古典サンスクリット文芸の最高峰をなすカーリダーサ (4世紀末) の3劇作の内2作 (いずれも本邦初訳) が擬古文調の見事な翻訳で収められている。現在はインド文学史上例の少ない政治劇である Viśākhadatta の Mudrārākṣasa の訳註を推進中であり、その完成が望まれる。(文学部)

< 部 局 の 動 き >

生体医療工学研究センターが
開所式を挙る

生体医療工学研究センターの開所式が、11月20日に京都市国際交流会館において、西島安則総長をはじめ多数の関係者の出席のもとに挙行された。本研究センターは、すでに京大広報 No.394において述べたように、医用高分子研究センターの時限到来による廃止をうけて新たに本学に6月8日付け設置されたものである。

祝辞のなかで西島総長は、これからの医療における工学と医学との間の学際研究の必要性を強調し、10年前に医用高分子研究センターが本学に設

立されたときの経緯と、設立委員として当時の思い出を語った。

なお、この開所式は、生体医療工学研究センターの設置を記念して11月20日と21日の2日間にわたって開催された「生体医療工学に関する国際シンポジウム」の晩餐会も兼ねたものであった。

(生体医療工学研究センター)



法学部で創立90周年記念式典

法学部は明治32年(1899)京都帝国大学法科大学として創設され、昨年創立90周年を迎えた。これを記念して、法学部では、平成2年11月24日午後1時30分から、京都市左京区宝ヶ池の国立京都国際会館大ホールにおいて法学部創立90周年記念式典を開催し、引き続いて同会館内イベントホールにおいて法学部創立90周年記念汎有信会大会を行った。有信会は法学部教官、卒業生及び学生からなる親睦団体である。

記念式典は各界の来賓・招待者、多数の卒業生及び学生の参加をえて、朝比奈千足氏(昭和6年卒業、朝比奈 隆氏の長男で隆氏病気のため代役)指揮京都大学交響楽団による記念演奏で幕をあけ、まず北川善太郎法学部長が法学部の歴史を辿り将来への展望と決意を示す式辞を述べた。続いて、保利耕輔文部大臣(佐藤禎一文部省高等教育局審議官代読)、西島安則本学総長、石井紫郎東京大学法学部長及び伊東光晴本学経済学部長(海外出張のため菊池光造経済学部評議員代読)の祝辞が述べられた。いずれも、それぞれの立場から法学部への期待を表明されたものであった。最後に祝電を披露して式典は終了した。引続き場所を移して賑やかに吉祥院六斎(重要無形民俗文化財)が演じられるなか90周年記念汎有信会大会が開かれ、来賓各位による鏡割と90歳になられた田中周友名誉教授の乾杯発声、各地の有信会支部代表者の挨拶、京都大学グリークラブの演奏と続き、参加者は会場に多数展示された古い写真のパネルの前で杯を重ね、5時過ぎようやく散会となった。

法学部では90周年を機会に学術交流基金の設立及び同基金による事業の一つとして学術交流基金講演会を企画し、現在卒業生を中心に募金活動を行っている。これによる講演会は既に去る10月24日、元最高裁判所長官矢口 洪一氏(昭和18年卒業)を迎えて開催され、その講演内容を印刷したものが式典当日参加者に配布された。

法学部は現在39講座(うち2講座は大講座)を擁しているが、今後益々人員と施設の充実に努力し、現代社会が要請する法学・政治学教育と研究の高度化に対応していく所存である。(法学部)



<紹介>

霊長類研究所神経生理研究部門

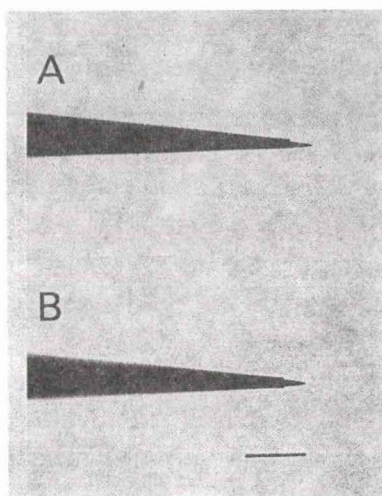
神経生理研究部門は、霊長類研究所の創立（昭和42年6月）とともに生まれた。

生理学の方法を使って、霊長類を研究する部門であるが、創立当初から、霊長類が感覚を受容し、行動や運動を起こすことに関わっている脳領域のうち、霊長類で重要になってくる脳領域の研究を志した。そのような脳領域は、大脳新皮質であり、大脳連合野である。特に注目したのは前頭連合野で、この領域が働いて手を動かすメカニズムを細胞レベルで研究することであった。

前頭連合野は、高等動物、なかでも霊長類、その中でもヒトで、高度に発達（形態が大きくなり、複雑な行動を支配）している。この働きを研究するには、マカク属のサルが、取扱い上容易であるし、解剖学その他の基礎データが豊富にあるので、アカゲザルやニホンザルが、主に使われている。1年間に20～30頭が実験に供されている。実験用サルは、原則として、研究所のサル類保健管理施設で飼育しているサルから、生まれ育ったもので、実験用に都合のよいサルがえらばれる。自家繁殖させたサルだけを使って、神経生理学の研究を行っている研究室は、今のところ、世界で当神経生理研究部門だけである。

働いている前頭連合野から単一の神経細胞の活動を記録し、感覚入力（主に視覚）と手の運動との相関関係や因果関係を調べる（慢性単一ユニット記録法、相関法とよばれる）のが毎日の実験になる。そのために、サルの頭部が動かないようにする特殊な工夫が必要で、モンキーチェアと特殊な固定装置が開発されている。創立以来、改良が加えられ、安定して神経細胞の活動が記録できるチェアが開発されている。サルが手を動かしても頭部が動かず、1個の神経細胞の中に安定して電極を刺入し、シナプス電位を記録することも可能である。また、記録した細胞の形態も顕微鏡の下で、はっきりと同定できる場合もある。

神経生理学者の研究に必要な道具として、顕微鏡、神経組織の選択的染色法と微小電極があげられる。研究の目的に応じて、都合のよいものが選



新しく開発した多連ガラス電極でつまれたタングステン電極（タングステン製でまわりにガラス管がとりまいており、その中に物質を入れ、電気を流して神経細胞の膜に与えて効果を調べることができる。Aは使用前、Bは数ヶ月間、数百回脳に刺入してもほとんど変更がない。横棒は50ミクロン）

ばれるように、当研究部門ではなっている。顕微鏡は神経細胞の大まかな形態が見えればよい。これに微細構造が画ける装置（カメラ・ルチダ）がついており、不満足ながらも画像処理装置もついている。染色法としては、通常に行うのはニッスル染色であるが、頼めば20年来の経験を持つ技官が処理してくれる。微小電極として使われるのは、金属電極（タングステン、エルジロイ合金鉄、白金）、ガラス微小電極（細胞内記録用）、炭素線源を封入した多連ガラス電極（物質をイオン電流を流して神経細胞に与えることができ、細胞の存在物件を100ミクロン程度の誤差で決められる）などであるが、注文に応じて技官が製作、またはその指導をしてくれる。

慢性単一ユニット記録を行うための技術、設備と経験は充分にあるので、研究者は、研究の目的を考え、サルに教えるパラダイムを考えてサルを訓練し、良い研究成果を出すことに専念すればよい。

研究は、前頭連合野と限らず、側頭連合野、運動連合野、記録に関係している扁桃体に及んでいる。また、単一神経細胞の記録だけでなく、行動と伝達物質の関係の研究も行われている。また、生理学的方法だけにこだわるのではなく、解剖学的研究、生化学的研究も行われている。要は、霊長類で高度に発達している脳のメカニズムを解明することを目的としている。

（霊長類研究所）

計 報

西谷 啓治 名誉教授

本学名誉教授 西谷啓治 先生は、11月24日 逝去された。享年90。

先生は、大正13年 京都帝国大学文学部を卒業後、本学文学部講師、助教授を経て、昭和18年文学部教授に就任、同38年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、大谷大学の教授となり、退職後も非常勤講師として勤務され、昭和40年日本学士院会員に選ばれた。

先生の専門は哲学、宗教哲学で、中でも宗教哲学の分野において優れた研究業績を残された。主な著書に『根源的主体性の哲学』、『神と絶対無』、『ニヒリズム』、『宗教とは何か』等がある。それらの業績は『西谷啓治著作集』全26巻に収録されている。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和45年には勲二等瑞宝章を授与され、昭和57年には文化功労者に選ばれた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学部)

長廣 敏雄 名誉教授

本学名誉教授 長廣敏雄 先生は、11月28日 逝去された。享年84。

先生は、昭和4年 京都帝国大学文学部を卒業後、東方文化研究所助手、同研究員を経て昭和23年4月同研究所が京都大学人文科学研究所になったことに伴い、同研究所研究員、同助教授を経て昭和25年人文科学研究所教授に就任、同44年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、橘女子大学（現 京都橘女子大学）教授、同大学学長を歴任された。

先生の専門は、中国美術史、中国仏教美術の研究で、中でも中国仏教石窟の研究において数多くの優れた研究業績を残された。主な著書に『雲崗石窟』、『六朝時代美術の研究』、『飛天の芸術』、

『雲崗と竜門』等がある。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和27年学士院恩賜賞を授与され、同51年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(人文科学研究所)

石井完一郎 名誉教授

本学名誉教授 石井完一郎 先生は、12月1日 逝去された。享年71。

先生は、昭和19年 京都帝国大学農学部農学科を卒業、大阪学芸大学講師を経て、昭和29年 京都大学教育学部助教授、同57年教育学部教授に就任、同58年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

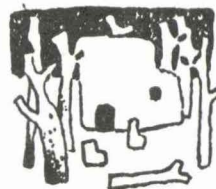
この間、学生部の補導主事として学生補導に当り、昭和31年6月に京都大学学生懇話室の設立とともに、そのカウンセラーを委嘱され、以来27年間にわたって京都大学学生の教育相談に携わり、昭和57年6月以降は学生懇話室室長を務められた。

先生の専門は教育指導、特に大学生に対するカウンセリングであり、著書には、『現代教育指導論』（昭和28年）から『青年の生と死の間』（同54年）、『自立のすすめ』（同59年）等がある。わけでも、自殺をめぐる諸問題について多くの研究論文を発表してわが国における自殺予防学の開拓にあたられ、日本自殺予防学会の副理事長、日本カウンセリング学会理事を務められた。

さらに昭和55年からは「京都いのちの電話」を開設、その理事・運営委員長として、生命の尊厳を守る活動に徹せられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(教育学部)



「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている「白馬山の家」を、今冬も下記により開設します。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の杓池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

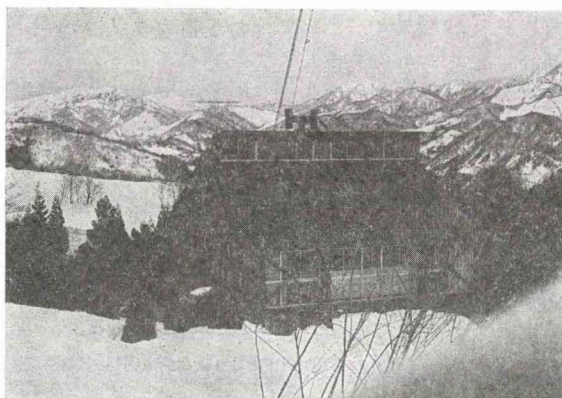
なお、建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室（ベッドで42名収容）、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学^{はくば}白馬山の家（電話 0261-83-2405）
2. 所 在 地 長野県北安曇郡^{あづみ おたり}小谷村大字^{ちくに}千国字柳久保乙869の2
（交通機関）

JR 大糸線「白馬大池駅」
下車、松本電鉄バス「親
の原」下車、徒歩約20分

3. 開設期間 12月20日（木）～1月10
日（木）並びに2月20日
（水）～4月10日（水）
4. 所要経費 1人1泊 使用料80円、
ほかに食費等実費程度
5. 申し込み及び利用に関する詳細は、体
育会事務室（西部構内総合体育館内、
電話学内2574）に照会してください。



（学生部）

日 誌

（1990年11月1日～11月30日）

11月2日 同和問題委員会

- 4日 アメリカ合衆国 Cornell 大学 Frank Rhodes 学長来学、総長及び関係教官と懇談
- 6日 評議会
- 9日 中華人民共和国 武漢大学 齊 民友 学長来学、総長及び関係教官と懇談
- 10日 京都大学自然史博物館設立推進委員会公開講座（以後17日、24日、12月1日）
- 12日 インドネシア共和国 B.J. Habibie 国務大臣来学、総長及び関係教官と懇談

13日～16日

- 平成2年度京都大学主任研修（第2回）
- 20日 生体医療工学研究センター開所式
- 21日 基礎物理学研究所統合記念式典
- // 国際交流委員会
- // 国際交流会館委員会
- 24日 法学部創立90周年記念式典
- 26日 学位授与式
- 30日 防火委員会

